

知っていましたか？

21年間生き続けた“脳死”者！

アメリカの脳死状態になった4歳の男の子が、人工呼吸器をつけて自宅で21年間生き続け、青年にまで成長しました。

(アメリカの小児神経学教授 アラン・シューモンの報告
: 1998年ほか)



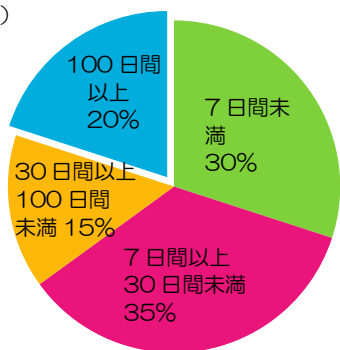
“脳死”は 人の死では ありません!!

「脳死だから死んでいる」と
思いこんではいませんか？

無呼吸テストを含む脳死判定後の子どもの生存日数(割合)

(厚生省研究班の報告：2000年)

日本でも、
8年以上生き続け
ている子がいま
す！



あなたも
あなたの家族も
名前を知らないあの人も
みんなたったひとつの命を
生きています。

“脳死”とされても、
懸命に生きる命があります！

原因不明のまま“脳死”と言われた2歳8カ月の
中村有里ちゃんは、1年9ヶ月生きて、身長が
伸び、体重も増えました。



七五三には、
人工呼吸器をつけて、
家族みんなで神社で
お参りしました！

もしもあなたの愛するひとが“脳死”といわれたら…。
「臓器を提供してください」といわれたら…。

迷っていいんです。
わたしたちの体は部品の寄せ集めではありません。
“脳死”の本当のことを知ってください。
そして一緒に考えましょう。



“脳死”という言葉は、臓器移植とともに
生まれました。
以前は、「不可逆昏睡」と呼ばれていましたが、
「心臓移植を成功させるためには、動いている
心臓が必要」という理由によって、呼び方だけ
が変えられました。
“脳死”という言葉によって、たくさんの人の
心の底に、「死んでいる」というイメージが
埋め込まれてしまっています。
しかし、そうではありません！

心の窓を開けて、
“脳死”のことを
もっと知ってください。



臓器移植法を問い直す市民ネットワーク

電話：080-6532-0916

メールアドレス：abdcnet@gmail.com

ブログアドレス：<http://blog.goo.ne.jp/abdcnet/>



脳死・臓器移植の本当の姿

2009年7月に「臓器移植法」が改定され、同法の枠内で「脳死は人の死」となりました。
これからは、本人が臓器提供を希望していなくても、家族の承諾があれば臓器は摘出されます。
しかし、「脳死が死ではない」のであれば、臓器の摘出は殺人にほかなりません。

“脳死”ってなんだろう？

“脳死”は、交通事故や虐待などによる頭部のケガ、出血、窒息、高熱など、さまざまな原因によって「脳の機能がすべて止まり、決して回復しない状態」とされています。

「意識も感覚もない」

「遠からず確実に亡くなる」

そのように“脳死”は言われてきました。

しかし、その言葉は、

本当の姿とはかけ離れたものです。



麻酔や筋弛緩剤を使って臓器を摘出！

体にメスを入れたとき、“脳死”者の血圧と脈拍は急激に上がります。のたうち回る“脳死”者から臓器を摘出するため、麻酔や筋弛緩剤を投与することは、移植に関わる医師の間では常識となっています。

生きながら自分の脳死判定を聞いた青年

脳死判定を受けたアメリカの21歳の青年は、実は意識があり、医師の発した「彼は死んだ」という言葉を聞いていました。意思を示すことができない彼はパニック状態だったと証言しています。判定を疑った従兄の対処によって生体解剖を免れ、釣りを楽しむまでに回復しました。

(2008年3月23日放送のNBC Newsより)

助かるはずの人が臓器提供者になる現状 臓器提供を迫られた女性が社会復帰

24歳の女性がハワイで交通事故にあい、昏睡状態になりました。家族は、搬送先の病院で全ての臓器の提供を求められましたが、彼女の回復を信じ、治療を続けてほしいと医師に懇願しました。女性は、1ヵ月後に日本の病院に運ばれ、半年後に退院し、社会復帰をして介護職についています。

(脳神経外科医 山口研一郎の報告:2004年)



“脳死”者がなめらかに手足を動かす「ラザロ徴候」

“脳死”者は、あたたかく、汗をかき、涙を流し、排便をして、成長します。赤ちゃんを産むこともできます。

そして、「ラザロ徴候」という胸の上で両手を合わせ、まるで祈るようなしぐさを繰り返すことがあります。

“脳死”者がこのような動作をすることは、長い間隠されてきました。

脳死・臓器移植は、誰かの犠牲がなければ成立しません。

愛する人のあたたかい血が流れる臓器を「社会の資源」と呼んで、利用するのが「脳死・臓器移植」です。

この「社会のお役にたつ」ことを基準にするという

考えは、遷延性意識障害者（植物状態）の方、

筋萎縮性側索硬化症（ALS）などの重度の障害を持つ方、

そして高齢者をも否定する足がかりを

作ってしまうことになりかねません。

まるで坂をすべり落ちるように。

わたしたちの体は、「社会の資源」なのでしょうか？

移植に頼らない医療へ向けて

移植を待っているすべての人に臓器が行き渡る社会とは、交通事故や虐待が多く、救急医療体制が整っていない社会です。

誰もそんな社会を望みません。現在は、心臓病の子どもへの補助人工心臓、ペースメーカー、ベータ遮断薬などを使った治療が効果をあげています(*)。移植以外の治療方法の開発をさらに進めていくことが、最も大切なことではないでしょうか。

(*長野県立こども病院の報告など：2009年ほか)

